

所属校	東京都立青鳥養護学校	氏名	田村 百代
派遣大学院	東京学芸大学	専攻・コース	障害児教育学 発達障害学
研究テーマ	個別学習と集団学習の相互関係を考慮した個別指導計画		
<p>1 研究の目的</p> <p>平成 11 年度の学習指導要領の改訂より、「個々に応じた指導」という点が重点化され、自立活動や重複障害児の教育にあたっては「個別の指導計画」が義務付けられた。東京都教育委員会は、1997 年（平成 9 年）2 月に「障害のある児童・生徒のための個別指導計画 Q&A」を呈示した。この中で、個別指導やアセスメントに基づいた個別の指導計画が作成・活用されることで、集団指導においても高い教育効果が期待できる」と述べられているが、「障害に応じた個別の指導計画を作成できてはいない」「システムの検討」「より活用されるための書式の検討」等課題が先行研究により多く指摘されている。</p> <p>この課題を解決する方策について考察するためには、近年盛んに研究されている重度知的障害児の「個別学習」を集団学習に般化させるため、個別学習との相互関係を重視した集団学習の授業を実際に実施し、その実施上の課題および、「個別の指導計画」を生徒の教育課程上の活動全般に反映するための改善課題を明らかにすることとした。これをもとに、「個別の指導計画」のモデルを考察する。</p>			
<p>2 研究内容</p> <p>(方法)</p> <p>①東京都内養護学校における研究ニーズの分析</p> <p>本研究では、個別学習と集団学習の相互関係における課題が、養護学校の教育指導において考慮されているのか、各養護学校での毎年進められている研究をまとめた研究紀要の記述を分析し、実際の教育現場である各養護学校のニーズを明らかにすることを目的とした。</p> <p>②個別指導計画作成と授業改善に関する教師の重要度調査における一考</p> <p>本研究では、検討 1 のデータによって明確になったキーワードを元に、「個別指導計画」作成と授業改善に関して教師の重要と考えることがらについて質問紙調査を行い、個別学習と集団学習との相互関係が十分でない要因について考察することを行った。</p> <p>③個別学習と集団学習の相互関係についての研究</p> <p>個別学習の研究は、近年、視覚的教材を用いた個別学習の有効性は証明されているが、日常生活や集団学習への般化について、多く課題があるということが示唆される。そこで、本研究では、個別学習と集団学習を相互に関係させた授業を組み立てて実行していく経過において見られる課題を整理し、検討し、個別学習と一貫させた集団学習を構築することを検討 3 で考察する。個別学習における事例研究として、高等部の生徒である音声言語のない重度知的障害を伴う自閉症児 A について、主に保護者・学級担任を中心に希望する教育目標等を聞き取り、その希望とアセスメントを踏まえて、コミュニケーションボードを使用したコミュニケーションの育成を 17 回の個別指導において、積み重ねた。さらに、個別指導を踏まえた集団授業「国語・数学」の授業を計画し、個別指導を般化するような授業改善を図った。</p> <p>(結果)</p> <p>①平成 15 年度の各校のデータ収集結果より、授業改善、「個別指導計画」という点に関しては、多くの養護学校で共通して扱われていた。個別学習と集団学習との関係を研究の課題として取り上げたところは、3 2 校中 1 7 学部あり、課題としては捉えられていることが指摘できる。</p> <p>②質問紙項目について、因子分析の結果、因子は 4 つ抽出され、累積寄与率%は 54.8%であった。回転後の因子負荷量行列をみると、教師が授業改善のうえで重視している因子を解釈できた。</p>			

第1因子は、アセスメントを有用とする因子である。

第2因子は、個別指導計画に基づく集団授業が有用とする因子である。

第3因子は、公開授業研究や外部評価が有用であるという因子である。

第4因子は、個別指導計画の活用を有用とする因子である。

しかしながら、本研究より、個々の生徒の特性に基づく集団授業を重視する教師は、アセスメントを重視する傾向にないという結果となった。これは、知的障害養護学校において、個々の生徒の特性は集団授業を行なう上で重要視されているが、アセスメントという手続きによらずに評価されたことが推測できる。

③初期発達診断検査を行い、保護者・学級担任とのカンファレンスに基づいたアセスメントおよび個別指導を行っていたのにも関わらず、そのアセスメント結果が個別指導計画に十分生かされていなかった。また、対象児Aの国語・数学における評価表より、個別学習では、「知識・理解」「技能・判断」に関しての項目を重点としているが、集団学習では「関心・意欲・態度」「思考・判断」「知識・理解」を学習の目標として大切にしている。

以上の結果から、アセスメントから一貫した観点で生徒個々に対して、指導をするということが重要であり、それが「個別の指導計画」の考え方である。共通した観点には、評価基準である4観点((関心・意欲・態度)(思考・判断)(技能・表現)(知識・理解))が有効であるということが明らかにされたのである。

評価方法に関しては、目標に準拠した4観点に基づいて評価基準を設定すると、担当者が異なっても、同じ評価基準で評価でき、さらに、授業での成果・次回の課題が明確になる。評価表の作成を設定し、授業担当者全員及び学級担任・保護者に聞き取りをしたところ、全員が、作成した評価表の方が分かりやすく、今後の指導に生かせるとの結果が出た。このことから、4観点の評価基準に基づいた評価表は、授業における生徒評価に有効であると指摘できる。

3 研究の成果と課題

本研究においては、東京都内の養護学校の実情に迫り、個別の指導計画の研究を根底から見直した。①より、養護学校の各学部間で教師からみた児童・生徒のニーズの違いが明らかになった。②により、教師の授業を改善するための課題に対する意識の違いが明らかになった。③により、アセスメントや個別指導と集団学習の相互関係を整理・検討することによって、個別指導計画が活用されるために必要な観点が明確になった。以上が本研究の成果である。

なお、本研究は東京都を研究の中心として取り組んでおり、研究主題として個別指導計画を取り上げているが、論文中にもあるとおり、「個別指導計画」＝「個別の指導計画」であり、東京都の個別指導計画にとどまらない個別の指導計画の研究であることも併記しておく。

今後は、本研究で示した個別の指導計画モデルの有効性を検証し、より活用できる個別の指導計画を目指す必要がある。さらに、同じ東京都内の養護学校でものニーズや教師の意識が異なると考えられるので、各学校に応じた専門家との連携が必要と考える。また、今後の特殊教育から特別支援教育への転換に関連し、「個別移行支援計画」および「個別的教育支援計画」と密接に関連しながら、様々な個別の計画の基盤となる「個別の指導計画」の活用について、さらに検討することも重要な課題である。

文献)

- ・東京都教育庁指導部（2000）高等学校新学習指導要領に関する資料
- ・東京都教育委員会（1992）障害のある児童・生徒のための個別指導計画 Q&A
- ・富樫敏彦（2000）知的障害養護学校における個別の指導計画、発達障害学 第22巻第3号 155-164
- ・東京都教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課（2004）平成16年度都立盲・ろう・養護学校教育課程の集計・分析

大学院派遣研修研修成果活用状況

所属校	東京都立青鳥養護学校	ふりがな 氏 名	たむら ももよ 田村 百代
派遣 大学院	東京学芸大学	専攻 コース	障害児教育専攻
研究テーマ	個別学習と集団学習の相互関係を考慮した個別指導計画に関する研究		

1 所属校での成果活用	<p>大学院派遣での研究において、個別学習と集団学習の相互関係を分析し、個別指導計画の再考を研究した。また、特別支援教育への転換に向け、平成17年度より「個別の教育支援計画」が導入された。今回の研究成果・課題を踏まえ、個別指導計画を改善・充実することで、「個別の教育支援計画」の構築に反映させていき、さらに養護学校高等部における発達診断検査等のアセスメントの重要性も明らかになったので、所属校内は、もちろん、エリアネットワークにおいて、教育相談の一環として、アセスメントの充実等尽力を注ぎたいと考えた。そのためにも、今回の大学院派遣は大きな意味があり、発達心理学及び教育が転換する背景・必要な知識を学んだ上、養護学校専修免許習得のほかに臨床発達心理士の資格を習得した。</p> <p>今回習得した知識・資格等を活用し、平成17年度は、特別支援教育コーディネーターとして所属校にて成果を活用することとなった。</p> <p>また、大学院での研究では、授業の評価観点についても検討を行った。「アセスメントから一貫した観点で生徒個々に対して、指導をするということが重要であり、それが「個別の指導計画」の考え方である。共通した観点には、評価基準である4観点((関心・意欲・態度)(思考・判断)(技能・表現)(知識・理解))が有効である」ということが明らかにされた研究を基に、平成17年度は、担当である「作業学習」において、外部アドバイザーとともに研究授業を行った。この研究授業は、所属校が委嘱を受けた「職業教育」研究に生かされている。</p>
2 委員会・研修会での成果活用	<p>1に示したように、大学院で学んだ「発達心理学」を活用するため、教育相談部会に所属をした。さらに、特別支援教育コーディネーターとして活動することとなった。今年度の特別支援教育コーディネーターの役割として、以下の方針で活動を行った。</p> <p>① 障害をもつ子供たちへの理解啓発</p> <p>② 地域の小・中学校への支援</p> <p>③ 所属校内の教育相談の充実</p> <p>①の理解啓発事業では、夏季休業中に地域の小・中学校の教員及び保護者を対象に「木になる子どもへの指導」について研修会を開催した。大学の心理職の教授や保護者を講師に招き、3日間で述べ250名の参加となった。</p> <p>②については、地域である世田谷区を中心に展開をした。世田谷区は94校あるので、所属校に近い40校ほどと連絡会を開き、学校の現状把握に努めた。また、その内10校ほどは、児童・生徒の行動観察を行い、研修会やケース会議に参加し、指導の相談・助言を行った。現状では、養護学校の高い専門性を必要としている学校が多く、今後ますますニーズが高まるであろう。</p> <p>③については、もっとも重要課題とした点である。養護学校の教員は、高い専門性を持っているので、学校全体での教育相談システムがほとんど活用されていない現状である。特別支援教育コーディネーターとして、指導相談及び外部アドバイザーとコンタクトを取り、支援会議を試行したところ、かなり、校内のニーズがあることが明らかになった。今まで学級担任が抱えていた難しい課題がある生徒に対して、コーディネーターが一緒になって検討することで、外部専門家とともに支援会議が設定できた。今後も引き続き重要課題であろう。</p>

<p>3 成果を生かした研究授業等</p>	<p>大学院での「アセスメントから一貫した観点で生徒個々に対して、指導をするということが重要であり、それが「個別の指導計画」の考え方である。共通した観点には、評価基準である4観点(関心・意欲・態度)(思考・判断)(技能・表現)(知識・理解)が有効である」ということが明らかにされた研究」の成果を活用するため、担当教科である「作業学習」において外部アドバイザーの下で研究授業を行った。今回は、作業学習なので「工程分析」はもちろん、生徒の「課題分析」及び「能力分析」も行い、その分析結果が授業に生かされているかを評価していただいた。研究授業では、生徒への声のかけ方や賞賛の仕方等助言をいただいた。この助言をしっかり受け止め、改善をし、今年度中に再評価をしていただく予定である。この研究授業は、所属校が委嘱された「職業教育の充実」研究のひとつとして研究成果をまとめ、次年度に生かすことになっている。また、「工程分析表」「課題分析表」「能力分析表」については資料として添付している。</p>
<p>4 今後の活用計画等</p>	<p>平成17年度、特別支援教育コーディネーターとして活動を行って、新たな課題が明確になった。当初、所属校及び地域の各学校の方針がはっきりしておらず、年度の後半まで本校の明確にならなかった。今後は、センター校としての役割を明確にし、また、地域の学校の管理職・教員の意識改革が必要であろう。また、5区合同連絡会という、エリアネットワークが構築されたが、情報の整理が必要である。さらに今後、エリアネットワークとしての活動方針を検討し、効率よく進行することが重要と考える。</p> <p>また、地域の小・中学校は各校ニーズが異なり、正確な現状を把握し、整理する必要がある。その各学校の状況を整理した資料を、区へ報告し、次年度の本校の役割を検討する必要がある。さらに、世田谷区における特別支援教育推進モデル校との具体的な連携はあまり進んでいない。世田谷区教育委員会「特別支援教育について 最終報告」を受けて、本校の具体的な役割を明確にすることが課題であろう。</p> <p>「個別指導計画」を生かした授業の改善については、担当授業のほかは広がっていない。自分が研究授業を行うことで、学校全体が授業改善につなげる研究授業が盛んになることを望む。今後も、人材育成とともに授業改善を進めて生きたいと考えている。</p>

課題分析表(1年陶芸班)

支援段階:A:援助なし/B:声かけのみ/C:
指さしのみ/D:声かけ+写真カード/E:声
かけ+指さし/F:モデル/G:身体介助/H:

工程	工程分析項目	課題分析項目	生徒氏名 A		生徒氏名 B	
			支援段階	具体的な支援方法	支援段階	具体的な支援方法
粘土のばし	粘土準備	粘土がおいてある場所がわかる	A		A	
		粘土をつかむ	A		A	
		粘土を箱からだす	A		A	
	粘土のばし	道具を決められた通りにセットする	A		C	ほぼできつつある
		粘土板上に粘土を置く	A		A	
		布をかぶせる	B		G	補助具検討中
		たたら板を粘土の横に置く	E	たたら板補助具で置くだけにす	F	たたらいたの補助具
		めんぼうでのばす	D	補助具に矢印を記入	F	たたらいたの補助具
		たたら板の厚さにのばす	G	補助具	B	持続しないので小さな粘土
		たいらにのばす	G	補助具	F	時々印を付け目安にする
型抜き	準備	準備する道具を理解している	A		A	
		道具の置いてある場所が分かる	A		E	机に用意しておく
		道具をセットする	A		A	
		しわになっているのを整形する	F	粘土伸ばしたまま型抜きする	H	検討中
		型抜きをあてる	G	小さい型抜きから徐々に練習	B	垂直にするよう声かけ
		型抜きをもちあげる	G	やりかたを教える	A	
		型抜きに力をかけきれいに切り抜く	F	見本を見せる	G	机の高さを工夫
		余分な粘土をきれいにはがす	G	タンポをいれて抜くようにする	A	
		余分な粘土をボウルに置く	A		B	うながしをする
	運ぶ	型抜きした粘土を持ち上げる	E	指の跡が付かないよう声かけ	E	指の跡が付かないよう声かけ
		型抜きした粘土を決められた場所へ運ぶ	G	運び板を使用	B	うながしをする
		切り取った粘土を正確に石膏型の上に置く	E	指の跡が付かないよう声かけ	E	教員が受け取る
	片付け	道具を洗う・ふく	G	毎回体の使い方を教える	E	検討中
		道具を定位置に戻す	A		B	うながしをする

A	後期の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶・報告など働くためのマナーの基本を養う。 ・最後までやり遂げる力を養うことで、自信をもつ。 ・手と目の協応の力をつける。 	手立てとして	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつの練習を率先して行えるように係仕事にする。 ・達成感・自信につなげるため、補助具の工夫を行う。 ・同じような作業内容を2ヵ月間ずつ繰り返し、続ける。
	11月15日の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶・言葉遣いに気をつける力をつける。 ・手の巧緻性を高める。 ・そうじを隅々まで行えるようになる。 	手立てとして	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶する練習時間を設定する。 ・前回より少し扱いが難しい型抜き型を使用する。
B	後期の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で道具の準備・片づけを行う ・最後まで作業を続ける ・粘土のばしで力を入れられるようにする 	手立てとして	<ul style="list-style-type: none"> ・粘土を伸ばすときの麺棒の工夫・机の高さの工夫をする。 ・道具の片づけ場所が分かりやすいように道具棚を整える。 ・写真カードを使用
	11月15日の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・手元をよく見て作業する。 ・最後まで作業を続ける。 	手立てとして	<ul style="list-style-type: none"> ・机の高さの工夫をする。 ・粘土を小さくして、工程に変化をつける

陶芸班 工程分析表

板作り 石膏型によるお皿作り工程

工程	工程内容	補助具等	生徒の課題	教員の留意点
①粘土のばし -1	a) 粘土を取りに行く b) たたら板を左右に置き、めんぼうで粘土をのばす c) 所定のテーブルの上に置く d) マグネットを貼る	めんぼう たたら板 粘土板 布2枚 マグネット 作業量板	・粘土が平らになるように、見本の写真をよく見て、判断する。 ・のばすとき力を入れる。	・時々粘土ののばし具合を評価する。
②粘土のばし -2	a) ①でのばした粘土を取ってくる b) たたら機をまわして粘土をのばす c) 所定の場所へ運ぶ d) マグネットを貼る	たたら機 マグネット 作業量板	・たたら機の操作 ゆっくりハンドルを動かす ・次のテーブルに運ぶとき、のばした粘土が崩れないように	・ある程度(2cm弱)粘土がつぶれたか確認 ・たたら機の操作の確認
③切り取り -1	a) 型紙を粘土にあて、切り張りで切り取る b) 石こう型に小麦粉入りたんぽをはたく c) 石こう型にねんどをのせる d) トレイに置く e) マグネットを貼る	型紙 切り針 石こう型 マグネット 作業量板 小麦粉入り タンポ	・型紙が動かないようにあてる ・切り針の扱いに注意する ・粘土にシワがあるときは、指で指すって成形する。	・生徒の切り針の扱いは中止して、安全面を指導する
④成形	a) タンポでたたいて、形を整える(3分)	タンポ 石膏型 ろくろ タイマー(必要に応じて)	・タンポ跡が付かないようにたたく ・たたくときは、中心から周辺へ順にたたく ・ムラなくたたく	・石膏型からたたらが外れていないか ・タンポ跡はついていないかの確認 ・ムラはできていないかの確認
⑤切り取り-2	a) 高台の上で、弓を使って端を切り取る。 b) 報告 c) トレイに入れる(石膏型の間に新聞紙を入れ、石膏型が割れないよう) d) マグネットを貼る	高台 弓 マグネット 作業量板	・石膏型に沿って、弓を直角に合わせて切り取れているか ・石膏型を丁寧に扱う ・トレイの満杯時、判断して次のトレイを取る	・きれいに切り取れているかの確認 ・石膏型を丁寧に扱っているかの確認 ・トレイの移動の確認
⑥素焼き前 仕上げ	a) 乾燥したお皿の縁のマジックを削って落とす。 b) 報告 c) 削り終えたらトレイへ移す d) トレイが一杯になったら、廊下に運び、「削りまだ」のトレイを運んでくる。	紙やすり ボウル マスク	・マジックを紙やすりで削り落とす。(縁のなめらかさの理解) ・お皿を割らないように力を加減する ・トレイの満杯時、判断して次のトレイを取る	・縁はきれいになめさされているか確認 ・トレイの移動の確認
素焼き				
⑦やすりがけ	a) 素焼きをした皿の表面を紙やすりでやすりがけする。 b) 報告 c) 削り終えたらトレイへ移す d) トレイが一杯になったら、廊下に運び、「削りまだ」	紙やすり	・マジックを紙やすりで削り落とす。(縁のなめらかさの理解) ・お皿を割らないように力を加減する ・トレイの満杯時、判断して次	・縁はきれいになめさされているか確認 ・トレイの移動の確認
⑧撥水剤をぬる	a) 型紙をあて、鉛筆等で撥水剤を塗る部分に印を付ける b) 撥水剤をぬらない部分にテープをはる。 c) 色の付いている撥水剤を塗る。 d) 撥水剤がついている方を表にして乾かす。	型紙 鉛筆 撥水剤	・型紙どおりに印が付けられるようにする。(正確さ) ・印をはみ出さないように撥水剤をぬれるように集中する。	・型紙がずれやすい生徒には、テープ等で補強する。 ・テープを一人でははれない生徒には支援する。
本焼き				
⑨釉薬がけ	a) ポリバケツに入っている釉薬に手で入れ、まんべんなく釉薬がかかったら、取り出す。 b) 釉薬の練れていない部分をスポンジや指でならす。	釉薬 スポンジ 新聞紙	・釉薬が玉にならないように注意をする。 ・釉薬のならしは、細かな注意が必要。	・釉薬の濃度の調整が必要。 ・ならしに関しては、生徒のできる範囲で。
⑩余分な釉薬を落とす	a) 釉薬が乾いたら、濡れたスポンジで撥水剤の上についている余分な釉薬を拭き取る。 b) 撥水剤がぬってある方を表にして湯かす。	水の入ったボウル スポンジ	・撥水剤の上についている釉薬のみはがすようにする。	・必要な釉薬がはがれないように必要な生徒には、カバーをしておく
本焼き				

①仕上げ	a) 粉を落とすために洗う。 B) トレイにおき、乾かす。	トレイ	・割らないように丁寧に扱う。	・洗い場が深いので、生徒が無理な姿勢をとらないように注意。
------	----------------------------------	-----	----------------	-------------------------------